

重い愛を思い知れ。主に体で。

体験版

受け溺愛執着系社会人×クール無口大学生

受け：七瀬（ななせ）

攻め：理玖（りく）

要素：執着攻め、ネチネチ、焦らし、攻めフェラ、アナル舐め、前立腺責め、深いキ、結腸責め、乳首責め、耳責め、言葉責め、連続絶頂等

「おかえり七瀬。こんな時間までどこ行ってたの？」

時刻は既に、深夜帯に差し掛かった夜。時計の針は頂点を回っていたにも関わらず、ドアを開けると恋人が玄関で待っていた。けれどこれは、決して温かいお迎えではない。それは空気で察せる。嫌な空気に、俺も少々言い淀んだ。

口調そのものは優しく感じるけれど、有無を言わず答えを引き出そうとするやり方は、半分尋問に近い。それを瞬時に理解したものの、咄嗟に上等な言い訳を思いつくわけもなかった。バカ正直に答えるのもどうかと思ったけれど、そもそも口が上手くない俺は、さっさと事実を伝える。

「...友達と夜遊び？」

「そうか。夜遊びね」

ざっくりと夜遊びの言葉にまとめたが、実際のところは色々な場所を転々としながら、複数の友人と遊んでいた。でもそれを1から10まで説明するのも面倒だし、何より詳細を伝えたら納得してくれるかも怪しい。だから俺は、なるべく端的に本日の行動を言い表した。

けれどもお怒りムードの恋人は、俺の答えが心底氣にくわなかったらしい。そうか、とは言ったものの、夜遊びのワードの後、額に見えない怒りマークを3つほど浮かべた気がする。それから、ポンと俺の両肩に手を置いた。

「なるほど。これは俺の愛が足りなかったか」

でも、会話としてほぼ成立していないのに、彼がなにかを納得したのが奇妙だ。正直、どう見ても腑に落ちない様子なのは分かる。かといって彼の心境を、俺側から言及できるほど度胸がない。

それに何より、この顔だ。顔は笑っているのに、気持ち的には一切笑っていない人間の表情というものを、俺は人生で初めて知ったかもしれない。

2つ年上の理玖とは、付き合ってからおよそ2年くらいになる。大学で出会ったときにはお互い一人暮らしだったけれど、一足先に社会に出た彼から、一緒に住もうと言われてトントン拍子に同棲を始めた。2人で話し合っただけの1LDKは、学校からも遠くないし、駅も歩いて行ける距離だし住み心地はいい。

とはいっても、恋人と暮らす家に友達を呼ぶには気を使う。だから、友人同士で遊ぶなら基本的に外だ。それに俺も、今年が卒業年度。ハメを外して遊ぶラストチャンスなのだからと、夜の呼び出しに応じてみた。19時に合流した居酒屋で飲んで、近くのコンビニでアイスを買ってブラブラした後、ナイトタイムのカラオケまで満喫して、今がちょうどその帰り。オールにはならなかったのも、大学付近のカラオケから歩いて帰って、遅い時間だから理玖は寝ていると踏んで家の扉を開けたらこれだ。

言い訳にもならない言い訳をした後、靴を脱ぐのもそこそこに、理玖は俺の腕を引いた。雰囲気としては良くない感じだ。あとは、向かう先がリビングではなく寝室なのも怖い。

「...キレてる？」

「まさか。俺の心はそんなに狭くないよ。ただ、俺に内緒で遊んでたのがちょっと許せないだけ」

そして、理玖が怒っているかの最終確認をしたら、火に油を注ぐ結果になった。それから、特に連絡を入れずに遊びに出かけたことを反省する。どうせ近くだし、飲んだら帰るだろうと思っていて、理玖には少し出かける、としか言っていなかった。だったらコンビニかドラッグストアくらいに行くとか思わないだろう

うし、それで深夜に帰ったことを咎められるのは仕方ないと思う。充電をないがしろにしていたスマホが、途中で電池切れになったのも痛い。色々と悪いタイミングが重なったなと、彼の後ろで小さくため息をつく。

この件に関して悪いのは俺だ。その自覚があったからこそ、きっと理玖からの長いお説教が始まるのだろうと、誘導されたベッドに座ったときには覚悟を決めていた。けれど彼は、お互いベッドの端に座ると、想像以上に優しい力で俺の両手を握ってきた。

「そんなに暗い顔しないで。さっきも言ったけど、俺、七瀬が遊んでたのを怒ってるわけじゃないよ？」

「...ホントに？」

「うん。俺はね、むしろ反省してるんだ」

「反省？何を？」

「最近忙しくて、七瀬との時間を作れなかったから。その反省」

意味深に手を握られて、むしろ俺は困惑していた。ここは普通、帰りが遅くなるなら一言断りを入れるべきと、年上の恋人らしい喝が入るべきじゃないのか。なのになんで、俺ではなく理玖が反省しているんだろう。でも言われてみれば、最近の俺たちの間では、恋人としての時間はめっきり減っていた。

俺にはよく分からないが、社会人には繁忙期というものがあるらしい。理玖の会社はちょうど決算期とかなんとかで、帰りも遅かったし、全体的に忙しそうではあった。お疲れムードだったので、夜のスキンシップもそこそこに眠りにつく日

は続いていたし、2人の時間が少なかったのは否めない。だけど今夜のことと、理玖の忙しさがどう繋がるんだろう。

「明日からは元々有給消化の日だったし。七瀬とゆっくりしようと思ってたからちょうどいいや」

「どういうこと？」

「大好きな七瀬のこと、今日はとことんかわいがってあげるね？」

理玖の口調も手つきも、変わらず優しいままだ。それが逆に怖かった。あとは十分な説明もないまま、彼だけが一人で話を進めていくのも変だと思う。理解が追いつかない俺は、理玖の言っている言葉の意味が分からずに、ただただ眉をひそめた。

一体全体、恋人が夜遊びした帰りに、どうしてこんな展開になる？しかもさっきはあんなに怒っていたのに、施されるキスが信じられないほど優しいのも妙だ。とはいえ、今日のところは俺に非がある。彼から叱責されないのであれば、別に深く考えなくてもいいかと、俺は身体がベッドに沈んでいく間も特に抵抗しなかった。

きっと理玖も、本当はやりたかったのに、俺が不在ですねていたんだろう。だから今日は彼の満足いくまで、大人しく抱かれておこうと。そう判断したのがミスだったことを、これからじっくり味わうことになる。



「はあ、はあ、あっ、あ、ッ、や、ああ...っ！！？」

ぬるつく指に自分の中をかき混ぜられてから、もうかれこれ30分は経つんじゃないだろうか。理玖は元から丁寧に愛撫をする人ではあるけれど、それにしても今日はしつこすぎる。

いつまでも1本の指で弄り続けるなんて、今までは無かったことなのに。これはもう、丁寧の域を超えている。初めてするわけじゃないんだから、俺としては早く指を増やしてほしいし、何ならもう入れてもらってもいいくらいだ。けれど、さっきからそれとなく焦れていることをアピールしても、一向に先に進んでくれない。しかも先に進まないどころか、イキそうになったらいい場所を外して擦られたり、指を抜かれてかなりもどかしい。

「ん、っ、ね、ねえ...！も、いいから、もうっ」

「久しぶりなんだから、ゆっくりした方がいいでしょ？」

「大丈夫、だから、せめて指は」

「ローション足すから。足閉じてここ隠すのやめて？」

「んううっ...！」

早く早くと急かすように、抱えたままの枕を握りしめて足を閉じ、彼の腕を自分の内側に招こうとした。なのに理玖ときたら、指を抜いて、2本の指で孔を広げて中にローションを足してくる。

いいのに。そんなのもういないのに。不必要なくらい濡れていることなんか、理玖にだって分かるはずなのに。なんで早く入れてくれないのと、不満を滲ませながら彼を見る。だけど今日の俺は文句を言える立場じゃないから、口元に枕を当てて黙るしかなかった。

「ここ、ふにふにでヒクヒクしてて、とってもエッチな感じになってる」

「や...！そんな、の、違う...！」

「違わないよ。七瀬は全部かわいいしエロいの」

「ふうう...ッ！」

ぬぷりと入ってきた指先に、大げさなくらい身体がのけ反る。摩擦を和らげる液体を足しても、結局指の本数は増えなかった。それでも、刺激を待ちわびた身体が震えている。

今までたった1本の指で、ここまで溶かされたことがあっただろうか。がく、がく、と膝を揺らしながら、そんなことを考える。でも気持ちはいいけれど、物足りなさはもちろんあるから、期待した内部が収縮して、きゅうきゅうと彼の指を締め付けていた。それが恥ずかしくて、自分ばかりが求めているようで、悶々と熱が溜まっていく。

前に関しては触られていないのにガチガチだし、先走りもひどい。自分の腹に滴る欲深い水滴を見たくなくて、枕に顔をうずめた。

「はあ、はあ、ん、っう、あ、う、ううう...！」

「なんだか今日の七瀬は控え目だね。もっと声出してもいいよ？」

「〜〜〜...っ！」

理玖の声が聞こえても、俺はフルフルと首を横に振った。こんなぬるい責め方で、声が押さえられなくなるほど感じているなんて。恥ずかしくて俺が耐えられない。もっと全力で責められているならまだしも、前戯中の前戯じゃないか。俺はそんな欲しがりなビッチじゃないと、枕を味方に付けて無言を貫いた。ただし、押さえられるのはあくまで声だけだ。いい場所を軽く撫でられたくらいで、ガクッと揺れる下半身も。触ってほしくて震える熱も。太ももを撫でられるくらいで、背中までゾクゾクさせている様子も。全て理玖には見られている。

「ふっ、ッ、あ、あ、ん、んん...！」

「理玖の好きなところがコリコリしてきた。もっと触ってほしくなってる？」

今度の問いには、素直に頷いた。何度も何度も。早く触って、もっと触ってと、訴えるようにお尻が理玖の指を食いしめたのが分かる。その時に、ちょっと強めに前立腺を押されて、ようやく中でイケそうな気配を感じた。

「ふあ...ッ！あ、あ———.....っ！！？」

けれども絶頂に至る前に、ぬるんと指が抜けていってしまった。待ち望んだ解放だった分、喪失感が大きい。熟れ切ったお尻の中がジクジクと熱を持つのに、目の前の理玖はなんでも無い顔をしているから、俺の目からはポロポロと涙が零れてきた。

「な、んで...？今、俺...」

「ん？だって久しぶりだし。痛くしたくないからさ？」

「ッ、いいから...！痛くない、絶対痛くないからっ！もお入れて、理玖のがほし——」

「それはまだだめ」

「どうして...？」

「俺が愛し足りないから」

普段のセックスの最中、俺が露骨に理玖に入れてくれと頼むことは少ないと思う。仮に言ったとしても、理玖から欲しいと言ってとねだられた結果、頼まれて言うことがほとんどで、自発的に口にすることはほぼない。だから勇気をだしてねだったのに、それすら無下にされるとは。

やっぱり怒ってる。理玖は静かにキレているんだ。そしてこのパターンの怒り方は、俺の中で未知だ。いっそ、理路整然とお説教された方がマシだったかもしれない。だってこうなったら、どうやって彼をなだめればいいのか分からない。一つだけ分かるのは、俺には今の彼の行動も、今からの彼の行動も、拒む権利は無いということだけ。

俺を愛し足りないらしい理玖は、今度は俺の足を大きく開いて、その間に顔を埋めてきた。反射で足を閉じようとしたけれど、既に肩まで入り込んでいたから、大事な場所を守るには至らない。散々触って欲しいと願った場所へ舌が当たったときは、情けないくらいにいやらしい声が出た。

「んはぁッ...！あ、っ、んん、あ、理玖、理玖う...！」

「なあに？」

「も、っと...！舐め、て...！」

「どこを舐めてほしいの？」

「え...？い、今、舐めてる、とこ」

「だから、それはどこ？」

でも、俺の先端をゆったりと舐めた理玖は、あえてそれから舌を当てずに、数か所キスをする程度に愛撫を緩めてしまった。一度知った快感を手放すなんて、長い放置を体感した後の俺にできるわけもない。だからさっさと楽になりたいけれど、いつもは言わない言葉を求められて、きゅう、と縮こまるしかなかった。

そんなこと、理玖は言わせてきたりしなかったのに。なんで今日は意地悪するんだよと、枕の下で唇を噛む。それでも、言わなければ先に進まないならと、俺は自分の羞恥心よりも目先の快感を選んだ。

だけど、そのままストレートな表現で言うのはあまりにも恥ずかしい。だから俺は、自分の熱に唇を当てる理玖の髪をくしゃりと掴んで、ぐっと腰を突き出した。思わぬ行動だったのか、理玖も一瞬目を開いて驚いていたのが見える。

「お、れの...、先走り、ダラダラなとこ...っ！いっぱい、舐めて...？」

くい、くい、と腰が勝手に動くのが止められない。あまりに焦れすぎて、息も荒くなっている。もういい、舐めてくれないなら俺が理玖の口に入れてやる。それぐらいの気持ちだった。

「そういうの...。どこで覚えてくるの？夜遊びで教わるの？」

「俺とこんなことするの、理玖しかいない...」

「じゃあ俺が教えたのかな？七瀬のこと、俺がエッチに育てちゃった」

「ッ、ああああっ！！」

けれど、俺の言葉は理玖の機嫌をそこそこ上昇させたらしい。楽しそうに笑った彼は、ご褒美とでも言わんばかりに俺の熱に食らいついて、じゅう、と吸い上げてきた。それが気持ちよくて、腰までとろけてしまいそうで、頭に回っていないほうの手で理玖の肩を握った。いつのまにか防御ではなく、ただ彼を離すまいとしていた太ももで、ぎゅっと理玖の頭を挟む。

「ふぁ、ああ、きもち、い、い、あ、イク、イク、もう、出...っ！」

しかしながら、理玖の怒りの底は深かった。軽く機嫌が直ったくらいでは、まだまだ俺を許してくれないらしい。ちゅぱ、といやらしい音を立てて口が離れていく感覚に、まずは俺の足が嫌がった。がっとな彼の頭部を挟んで、逃がさないぞと距離が遠くなるのを防ぐ。

「やっ...！い、今、イケそうだった...！」

「ああ、そうだったの？じゃあ七瀬には悪い事したかも」

「ちがっ、分かったた、絶対分かって」

「ごめんごめん、次はちゃんとするから」

「ンンあッ！」

自分から文句を言える立場じゃないのに、ここに来てのおあずけはあまりにも切なくて、また目から涙が出てくる。

イケそうだったのに。今度こそイケると思ったのに。絶対わざと焦らされたんだと、俺は理玖の頭と肩から手を離して、味方の枕を握りしめる。

「んふ、う、うう、ッ、あ、あ、イク、イッ、は、は、あ、それ、やだ、も、っと、して、もっと、もっとおお...っ！！」

枕越しに、じれったい舐め方をする理玖にねだる。ぱく、ぱく、と軽く啜えて、ちょっと一舐めしては逃げていく口はなんなんだ。あえて舌尖だけをあてて、ゆっくりと竿の筋を上下に舐めるのも、気持ちはいいいけれど何かが足りない。先だ、先のところを舐めてくれと、今度は足を開いて腰を押し付けた。ここだから、欲しい場所に欲しい刺激をくれと、必死に腰を動かす。

「ああ、も、イキたい、イキたいいいゝ...っ！んあ、ああ、っ、ッッ！！？」

けれど俺の願いは、理玖には曲がって受け止められた。さっきまで弄られていた後ろの入り口を、ぬるぬると2本の指でくすぐられる。その気持ちいいとくすぐったいの境目のような刺激があまりに絶妙で、俺は枕を抱えたまま、ベッドの上で大きく身体を揺らした。それからちゅくりと熱の先っぽを口に含まれて、先走りを舐め取るように舌先を動かされると、今度は身体が悶えたまま元に戻らなくなってしまう。

「く、ひいい...ッッ！！？うあ、あ、や、それ、ッ、あ、あうううう.....
っ！！」

「んん、エッチな反応。七瀬はお尻も大好きだもんね？」

「っ、入れ、て、イカせて、も、無理、もおゝっ！」

「だからダメだって。俺が愛し足りてないもん」

「ッんゝんんん！！」

いっそ、ぬるい刺激でもイけるんじゃないか。そう思うくらいに高められている。でもイキそうになったら口は離されるし、かといってそこで長い休憩は与えられないから、熱は冷え切らない。気持ちはいいのに、出口がない。理玖はまるで、ゴールが無い迷路で迷子になる俺に、無意味なヒントを与えて楽しんでいるみたいだ。最終目的地がないと知りながら、あえて泳がせて、その過程を楽しんでいる。

「ひう、う、ッ、ごえ、なさ、も、イキたい、許して、許してえ...っっ！！」

「許しても何も、俺は怒ってないし」

「わ、るいの、俺、だからっ！だからもお、イカせて、辛いから、頭バカになっちゃうからあっ...！あふっ、ッ、イキ、たい、もお、あ、なんで、なんでええええゝ ...ッッ！！」

「七瀬がこんなに無理になっちゃうのは初めてだね。焦らされるのに弱いって、もっと早く知っておけば良かったなあ」

「はあうっ！！ッ、あ、あ、〜〜〜〜ッッんんん！」

ガクガクと奇妙に痙攣する身体がおかしい。悶えすぎて、全身爆発しそうだ。自分が何を言っているのかも良く分かっていない。イキたくて、切なくて、頭も身体もどうにかなりそうだ。呼吸も荒いし、涙も止まらない。

俺が必死に訴えているのも、限界なのも、理玖には分かるはずだ。なのにどうして彼は笑っているんだ？わざとイカせていないくせに。理玖にかかれば、今すぐに俺をイカせることだってできるくせに。なんで決定打を与えてくれないんだと、枕とシーツに頭を擦りつけてひたすらに暴れた。

けれども、人の身体とは状況に合わせて順応していく仕組みらしい。イキたいイキたいと願い続けていたせいか、とうとう大きな快感が与えられなくても、小さな快感で地味にイケてしまうように変化していった。だけれど、溜まった快感が外に吹き出すよりも、内側に溜まる快感の方が多い。そのせいで、弱くイキながらまたイッて、悦を感じながら再度快感を噛みしめるという、余計に自分を追い込むサイクルに入ってしまう。

「んはあゝ ああ...ッ！！ああう、ううっ、ん、んんっ！？ひ、あ、あゝっ、イク、イク、だめ、これ、だめええ...っ！止めて、一回とまっ、あ、ひぐ、う、うううっ！！」

「あれ、甘イキ始まっちゃった？イカせないつもりだったのに、七瀬が思った以上に敏感だったみたい」

「はふっ、っ、い、ま、だめ、溶けちゃう、うう、ううううんっ！っはあ、あ、おひり、も、おかひっ、あああ、だめだめ先っぽやああああっ！！」

「ふふふ」

「~~~~ッ！！っく、ああああんっ！！」

ぬるぬるぬると入り口だけを擦られ続けるお尻側も、ありえないほどにヒクついていて。そんな場所をくすぐられたくらいでイクなんて。意味が分からない。どうなってるんだ。身体がおかしい。もう終わりたい。そう思うのに、楽しそうな理玖は俺の先端を舐めてきたりする。今じゃない、それはさっき欲しかった快感だと、足をジタバタさせて彼から逃れようと躍起になる。

「だ、めっ！！もおだめっ！！終わって、終わりっっ！！」

「んん？でもほら、七瀬のこっちも美味しそうだよ？」

「ひゃあうっっ！！？」

だけれど、徹底的に俺をいじめるつもりの理玖は容赦がない。つつ、と舌を移動させると、今度はヒクつくアナルに舌を当ててきた。ぬろりと一舐めされただけで、バカみたいに膝が揺れたのが心底恥ずかしい。

「やっ、そこやだ、舐めるのやだっ！」

「七瀬は恥ずかしいから、ここ舐められるの嫌いだもんね？」

「わ、分かってるならっ」

「でも美味しそうなんだもん」

「んひっ、ッ、あ、だめ、中舐めないでええ...ッ！」

にゆるりと入ってくる舌の感覚は、正直何度やられても慣れない。でも気持ちいいのには違いなくて、ぞわわっと腰が浮く。しかも今日に関しては、ねちっこく刺激され続けた場所でもあるから、ひと際感じる気がした。だから腰が逃げてしまいうけれど、理玖ががっちり腰を押さえてきたので、彼から離れることができなくなる。

「はう、うう、ん、んっ、や、あ、ああっ！あふ、うう、ダメ、ダメだから、ゾワゾワしちゃうからあっ...！」

「腰が逃げてる。やだやだしないで？」

「ッ、だって、だってええ...！」

「まあ七瀬が逃げても、勝手に気持ちいいことしちゃうけど」

「んあああっっ！！？あああああ吸うのダメッ！！激し、い、いや、やああああっっ！！」

たとえ離れられないと分かっているけど、反射で俺の腰は動き続けた。ずり、ずり、とシーツを蹴る足が、理玖との距離を取りたがる。けれど理玖は、物理ではなく快感で俺を抑え込む作戦に出たようだ。

理玖はぐっと俺の足を広げて、お尻の孔の周りに親指を置くと、あえて外側に力を入れて、くぱりと強制的にアナルを開いた。それから開いた孔に舌を差し込んで、唇と臀部を密着させる。じゅうう、と卑猥な音を立てながら吸い付かれると、聴覚までもが犯されて、耳まで真っ赤に染まった。なのに中で轟く舌も俺を責めているから、ますます太刀打ちできなくなる。

「ふあああ、あっ、やううんっ！！やっ、それ嫌っ、ッく、あああゝ
あっ！！」

「エッチな七瀬のお尻が丸見えだよ？ほら、自分でも見てごらん？」

「ッッ！？」

けれど、理玖が犯してくるのは聴覚だけに留まらなかった。俺の足を思い切り前に倒して、膝が頭の横に付くくらい折り曲げてくる。そのせいでアナルを舐める様子が俺からも見えるようになったから、視覚まで汚染されて本当に恥ずかしかった。

「やっ！見たくない、からっ！」

「ええ～？見ないならここ、可愛がってあげないよ？」

「く、あ、は、は、はっ、あ、ん、んんっ、～～～…ッ！！」

もちろん俺が、わざわざ自分の恥部を見たいわけでもない。だから目を背けるのも、瞳を閉じるのも、当然の事だと思う。なのに理玖ときたら、俺が見ないなら愛撫をしないと決めているのか、つん、つん、と舌先でアナルを突ついて焦らしてきた。さっきまでは激しく責められていただけに、ここで再び焦らされるのはきつい。

だから俺は、耐えかねてそっと目を開いた。見たくもない恥ずかしい自分の痴態を目に焼き付ける。だら、だら、とだらしなく先走りを垂らす熱のはしたなさから、彼の舌を求めてヒクつくアナルの様子まで、はっきりと。

「ねぇ教えて？七瀬のここ、今どうなっちゃってるの？」

「っ、い、っぱい...！エッチに、なってる...！」

「でも七瀬は、もっとエッチなこととして欲しいって思ってるんでしょ？」

「や、も、言えない、いじめないで...！許して、もうイカせて...っ！」

「ふふ。恥ずかしくて泣いちゃう七瀬、かわいいね」

「ッああああ...！？は、あふっ、ッ、んんんっ！」

そして俺を精神的にギリギリまで追い詰めたくせに、理玖はここに来て足の付け根に舌を這わせてきた。そんな際どいところはいいから。もっと感じるところを舐めてくれと、思わず足を開く。そのせいで更に足の際を舐められてしまって、余計にどうしたらいいか分からなくなった。

アナルを見せつけられる時間が終わって足が下ろされても、まだまだじっとりと責められる時間は続く。ねちっこくアナルを舐められて、それでイキそうになったら舌が離れる。離れたかと思ったら、次は前に戻る唇が、ゆっくりと俺の熱を

奥の方まで飲み込んでいった。それで今度こそイケると期待するほど吸われてから、ぬぽんと音を立てて口が遠ざかっていく。

「くはあああ...ッッ！！ああゝ、お、ねがい、も、イキ、たい、ちゃんと出させてえっ！」

「愛し足りないから、まだダメだよ」

「いつ...ッ！いつになったら、それっ」

「さあ？いつになるかなあ？」

「っあゝ！あう、っ、ひ、あ、あああああゝ...っ！焼け、る、頭、おがし、く、なるうっ！っあ、あああ、許して、も、どうしたら、いい、の、俺、あ、あああああっ！！」

ジクジクと疼く中も、決定的な刺激がもらえない。中でイケなくても、前をもっと擦ってくれたらそれでもいい。舐めろなんて言わない。扱ってくれたらきっとイケる。そう思う。でもまだまだ愛し足りないの一点張りで、俺は延々と焦らされた。

もちろん途中で我慢できなくなった俺は、自分で扱いて出してしまうおうと思った。抜ければ多少冷静になれるし、この悶々とした感情は収まる。でも、伸ばした両手は理玖に捕まった。そのまま腕を引かれて亀頭の周りだけをねっとり舐めまわされることになったから、何の解決にもならなくて、俺の心がしんどくなるばかりだ。

「ひいいいゝ ッッ...！！そこもう、やえ、で...！先のところ、ばっかり...っ！
も、いやああっ！！」

「イキたいイキたいって、先っぽくぱくぱしてる。出せなくて切ないね？」

「っあ、あ、あゝ~~~~.....ッッッ！！んも、お、無理、無理いいゝ いゝ ...
！ど、してっ、イカせて、舐めて、もっと吸っ、あ、ひ、っ、ッッ！！」

無刺激で放置されるよりも、ちゅう、ちゅう、とわずかばかり吸われる方が苦しい。その度にかくん、かくんと律儀に腰が動く。射精を待ち望むのに、イケないまま寸止めされ続けた。こんなの狂ってしまう。後何分、俺は理玖の怒りに耐えなければいけないんだと、両手を下に引かれながら思っていた。

そうしてひたすら焦らされて、期待でいっぱいのまま弄ばれて、抵抗力を削られ続けていれば、抗う気持ちもなくなる。クタクタになるまでいじめられた俺は、既にベッドに転がっていた枕が腰の下に引かれたところで、ようやく空中に飛んでいた意識を取り戻した。

「っ、あ...？」

「枕はこっちに敷いておくね？」

「ん...」

返事をするのもやっとだったけれど、これは俺にとって大きな転機だった。わざわざ腰の下に枕を置く意味は一つで、それはようやく理玖が俺に入れる気になったという気持ちの現れだ。実際、ゴムを付けている理玖も見えたので、俺の予想は合っている。

そうか、やっと入れてくれる気になったのかと、心の底からほっとした。一生焦らされて終わるかと思ったけれど、さすがにこのままハメられたら俺もイクだろう。射精はできないかもしれないけれど、中では絶対にイクはずだ。

「来、て...？」

「もちろん。キスしながらでもいい？」

「うん」

彼の行動に、NOが言えるわけもない。だから俺は素直に足を開いて、身体を傾ける理玖に向かって両手を広げた。それから俺に覆いかぶさる彼の背に腕を回して、深く唇を合わせる。絡む舌とは別に、彼の切っ先も俺の孔と触れあったので、期待にそっと身体が震えた。

しかしながら、ここにきてまた予想外の事が起きてしまう。

正常位のまま、キスハメされることまでは合っていた。ただし挿入の速度が、異常なくらい遅くて困惑する。なんでだよ、もっと一気に入れられるはずだ、だってあんなにほぐされたんだからと、俺は足を回して彼を誘導した。早く、早く奥まで来てくれ。もう待ちきれないからと。けれど、絶対に腰を進めてくれない理玖は、じっくり、じっくりとしか入ってきてくれない。

「ッ...！？ん、っ、ふ、ふ、ふっ、っ...！！！？」

意味が分からない。なんでだよ、早く入れろよと思う。一応抜き取る気はないのか、徐々に埋まってきてはいるものの、1センチ奥に進むだけで頭が爆発しそう

だ。それでも身体が繋がるのは嬉しくて、焦れつつくても気持ちいい。仕方ない、どのみち時間をかければ全部入ってくるのは間違いない。だったら入れきってくれるまでは我慢だと、俺は理玖にしがみつきのながら、キスに集中することで意識を逸らした。

けれども、問題は全てが入ってから続いた。

自分の熱を埋めきったというのに、理玖はなぜか動きを止めてしまった。とうとう微動だにしなくなったソレに、期待感が最高潮に達している俺は、正直文句しか出てこない。これはキスをしてる場合じゃないと、慌てて口を離して理玖に訴えた。

「な、んで...？理玖、動いて理玖っ！」

「...好きだよ、七瀬」

「え...？」

「大好き。俺の七瀬。会ったときからずっとかわいい。今もね」

「っ！？」

ただし、焦れる俺に対しての理玖の反応は、また変わったものだった。ここに来て、なんでいきなり甘い言葉を吐いてくるのか分からない。今、そういう空気だったかと頭の中は疑問でいっぱいだ。けれど、なんだかんだ恥ずかしさや戸惑いが勝って、ぶわっと頬が赤くなる。

急になんだよ、いきなり何言い出すんだよと、ぱっと彼の口を覆った。

「やっ、何...！？そういうの、い、いちいち、言わなくていい...！」

「だって七瀬のことが大好きだからいっぱい言いたい。俺が好きって言ったらダメ？」

「そ、れは…。だめじゃ、ないけど」

「じゃあ言ってもいいよね？大好きって」

「うう…！」

なのに彼ときたら、口を覆った俺の手を取って、手首から指先まで丹念にキスをしてくる。なにそれ、意味わかんない、というか好きと言う事を否定する権利は流石にないだろうと、更にいっぱいいっぱいになってきた。ただでさえイキたくてそれどころじゃないのに、腹の中だけでなく頭まで理玖に犯されていく。

「い、言っても、いいから…！もう、動い、て」

「七瀬、かわいい、かわいいね」

「う、うう、ッ、っ…！」

ぎゅう、と抱きしめられるのは心地いい。肌が触れ合う面積が多いほど、理玖からの愛情が流れ込んでくる。それは嬉しいけれど、動いてほしいのも確かだった。イキたい、気持ちいい、俺も好きだと、とめどなく胸から腹から愛情がこみ上げてくる。

だけれど、あまりにも長い時間焦らされた身体は、とうとう俺すら想像できないバグを引き起こし始めた。ふるるっと理玖が入っている中が震えたかと思うと、一気に腹の奥からゾワゾワした何かがこみ上げてくる。

「あゝ...！？っ、や、待って理玖...！お、俺、何か、変...ッ！？」

「七瀬、もう一回キスしよっか？」

「しっ、しても、いい、けど...っ！そ、そろそろ、ホントに動いてくれないと、俺っ、や、ば...！」

「大丈夫。俺、どんな七瀬も愛せるから」

「ッ、っふ、ううううんんっっ！！？」

どくどくと、鼓動が早まっていた。きゅんと腹の奥が疼いて、無限に快感が沸き起こっている。なんだよこれ、ゾクゾク止まんないってと思う間も動けない。しっかり頭ごと抱えられてキスされるせいで、反射で動く身体ごと押さえつけられている。ああ、まずい、何か来てるのに。抗えない。もっていかれる、全身ガクガクしてて止められないと、きつく理玖の身体にしがみついた。

「くふ.....ッッ！！っ、んん、んゝ~~~~っっ！！っ、んんんうっ！う

ぐっ、ッ、あ、あゝあああああっっ！！？」

「ふふ。できたできた。上手に深イキできてるね？」

「ッッ！！！？はひう、っ、あ、あ、んんんんっ！！ひ、おあ、あ、あゝあああっっ！！？」

相変わらず、触れてもらえない前からは射精できていない。でも、ほとんど中も擦られていないから、中イキとも少し違う。それなのに身体の深い部分で絶頂しているのか、内臓の中までみっちり快感で埋まっている気がした。

バチン、バチンと腹の中で何かが爆発する。その波が頭にやってきて、ぶわっと視界が白む。だけれど意識が飛ぶほどではなくて、じわじわと高まり続ける感覚もある。

理玖と触れあう全ての部分が敏感になっている気がした。もはや何がきっかけでイッているのかも分からないのに、延々と絶頂が続く、不思議な時間が終わらない。

「ふ、あ、あああ、ん〜〜〜っ！んんっ、あ、あ、り、く、理玖うううう...
っ！な、に、これ、分かんない、分かんないいい...ッ！っひ、あ、イク、も、
あ、あゝ〜〜〜っ！」

「初めての深イキ怖い？大丈夫、今の七瀬は何してもイッちゃう、すっごく気持ちいい時間なだけだから。こうしてお腹とんとんってしてもイッちゃうでしょ？」

「ッ、ぎい...！？」

原因がはっきり分からないままイキ続ける俺は、何かに縋りたくて、理玖にしがみついた。彼の体温だけが俺の安心材料だったから、それ以外に頼れるものがない。でも俺を追い詰めているのも間違いなく理玖だから、彼の指先一つで、俺はまたドロドロに溶かされていく。

とん、とん、と、彼の入る部分を、腹の外側から軽く押された。中指と薬指で、本当にさする程度。だけどそれだけの刺激で、ビリビリと腹から重い快感が湧き上がって、反り返った背中がベッドに付かなくなる。なんでだよ、腹を押されただけでイクってどういうことなんだよと、自分でも理解が追いつかない。

「んはあああゝッ...！はあっ！は、あ、や、えで、お腹、押さないでええ...
っ！」

「お腹は嫌？じゃあどうして欲しいの？」

「わ、かん、な、っ、も、動い、て、動いてえっ！！」

「どうしようかな。深イキしてる七瀬がかわいいから、もう少しこのままでいたいなあ」

「くううンッ！！」

いっそ、じわじわと甘い刺激だけを与えられて苦しむくらいなら、抗えない快感で一気に意識を飛ばしたいくらいだった。ずっとこの絶頂を味わってられそうな気分にもなるけれど、間違いなく身体には毒な気がする。これ以上続けられたら、自分の身体が狂ってしまいそうで怖い。だから俺は理玖に深イキからの解放を願ったのに、彼はまだ満足いかないらしい。

ぎゅっと抱きしめられるのは嬉しいけれど、乳首を舐めてくるのは嬉しくない。いいって、そこはもういいからと、震える指先で彼の髪を掴む。その指から、彼が喉の奥で笑っている様子が伝わってきて増々苛立った。

笑っている場合じゃない。こっちは限界なんだぞ。ちゃんとイケていないのに、気持ちいいばかりで。なんで今日はこんなにねちっこいんだよと、駄々をこねる子どものように首を振った。でも、自分ばかり楽しむんじゃないという言葉は、数時間前の俺にも言えることだ。だから、今日の俺には理玖の取る行動を一切合切否定する権利はない。

「はふっ、ッ、ん、も、お、辛いいい...！んん、う、ごい、て、理玖っ、理玖ので、イキたいっ！」

「俺のでイキたいの？こうやって好きなとこ擦られたいって、ずっとずっと思ってた？」

「んはああ...っ！！あ、ひ、そ、お、そこ、ッ、うう、き、もち、とこ、好き、好き...っ！」

あくまで理玖のペースを崩さないように、どうにか彼が動いてくれるよう誘導してみたりもした。彼が乗ってくれるような言葉を紡いで、必死に抱きついて、せめて俺から離れないようにと、みっともなく足を絡める。でも動いてくれたとしても、かなりじれったい速度だった。すり、すり、と擦って押すように刺激されるいい場所は確かに気持ちいい。だけど、足りない。もっと愛してくれないと物足りない。

「っ、理玖、も、っと、して、お願いっ、お願いだからっ！」

「こんなに丁寧にしてるのに、何か不満？俺は七瀬のこと、じっくり愛してるだけだよ？」

「〜〜〜ッ...！」

でも、どれだけ訴えても、今日の理玖はこの一点張りだ。愛し足りないとか、愛してるからとか、とにかくそればかり。愛されているのは嬉しいし、愛想を付かされるよりは圧倒的にマシだとは思う。だけれど、俺がちょっと遊んでいたくらいでこれはあんまりじゃないのかと、段々不満がつのってきた。

とはいっても、ここで喧嘩にもつれ込むのはごめんだ。焦らされて限界な今は、俺が折れた方が早い。理玖は静かに、そして猛烈にキレている。これはもう謝るしかないんだと、俺は泣きながら彼に抱きついた。

「ご、めん、ホントに、ごめんって思ってるから...！も、夜遊び、しないっ！だからっ、だからもうっ」

「謝らなくてもいいよ。七瀬は大学生の最後の夏休みを満喫してただけなんだから。そもそも遊ぶなって言う方が無理だって。だけど俺も、今日こそは七瀬を補給したいなって気分だったんだよね？」

「っ、が、んばる、から、俺、今からでもっ」

「ありがと。じゃあ今日から3日間くらいは誰とも遊べなくなっちゃうかもしれないし、大学にも行けなくなっちゃうかもしれないけど。七瀬の傍には、俺がいるからいいよね？七瀬も俺が欲しいんだもんね？」

「っっ！！？」

しかしながら、理玖の怒りはとんでもなく根深かった。いやいや、コイツとんでもなくキレてやがると、俺は今になって思い知る。というか、本当にタイミングが悪かったのかもしれない。

きっと理玖は、ようやく取れた有休を、俺とめいいっぱい楽しむ予定を組んでいたんだ。言われてみたら、そろそろ休みだからどこかに行かないか、とも言われていた気がする。それを無下にした、俺の罪は重い。

「まっ、待って理玖、俺、そんなずっとは、できな——」

「七瀬は心配しなくてもいいよ？七瀬がしんどくなったら、俺が頑張ればいだけだからね」

「ッ、あああううう……ッッッ！！！」

自分の愚かさに気づいた頃には、理玖の真っ黒なオーラはピークに達していた。今更なだめるのは不可能だと悟ったときに、ずぶりとかなり深くまで、理玖の熱が差し込まれる。マズいと思って距離を取ろうとしたら、理玖は既に俺の頭と肩をしっかりと抱えていた。

ぐ、ぐ、と最奥をこねられて、何度も頭が吹き飛びそうになる。一番奥は、少し怖いから入れないでとお願いしたはずなのに。今日はそんなお願いも許してもらえないんだと、彼の腕の中でもがきながら嘆く。

「うはああゝ…っ！！あああっ！つく、う、ふか、い、深いいゝ…っ！」

「奥のどこ、ぐちゃぐちゃにされるのたまんないね？」

「はふっ、ッ、あ、あゝ、あう、うう、ん、い、く、イク、お、ぐで、
イツ、あ、ツんんん！！」

「このまま深いところで、七瀬がトロトロになるまでイカせるから。一緒に頑張ろうね？」

「ひいっ、ぐ、う、～～っあああ！は、は、や、あ、イ、く、イクイク、うう、
うううううああああっ！！」

ー続きは本編にてお楽しみくださいー